北海道大学　大学院農学院　修士論文発表会，2014 年 2 月 7 日，10 日

北海道におけるプレカット工場の実態と道産材利用の可能性

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　森林政策学　松下和敬

１．はじめに（背景・目的）

プレカット材の使用割合は 90%に達しており，住宅用材流通におけるプレカット工場の重要性は高まっている。現在，プレカット市場は縮小しつつあり，業界は転換期に位置している。木材業界の今後を考える上で，プレカット工場の実態把握が必要である。また，近年利用期を迎えている人工林資源の活用法の一つとして，住宅用材としての使用が期待されている。住宅用材への地域材利用を検討する上でも，その流通の要であるプレカット工場の実態把握が必要である。そこで本研究では，課題を以下のように設定した。1)北海道のプレカット工場の現状を明らかにし，転換期にあるプレカット業界の展望を考察する。2)プレカット工場の使用材を把握することで，プレカット工場における道産材利用の現状と利用拡大に向けた課題を明らかにする。

２．方法

道内で稼働している 30 のプレカット工場のうち,20 工場に対して聞き取り調査を実施した。また北海道庁などに対しての資料収集なども併せて行った。

３．結果と考察

1)工場の現状　北海道のプレカット工場は 3 タイプに分類できた。①建築業母体の工場：本業である建築作業の合理化を目的としていたため，供給先は自社建築物件にほぼ限定されていた。そのため，規模拡大の姿勢は見られなかった。②製材業母体の工場：年間加工坪数 20,000 坪以上の大規模工場では，特色ある加工による受注増加を受け，近年積極的に拡大していた。道北や道東，道南等の各地方にも分散して立地しており，主に地域内を対象にした拡大をしていた。年間加工坪数 20,000 坪未満の中小規模工場では，現加工量で満足，まだ状況を見極めているなどの理由により規模拡大は見られなかった。③総合木材業母体の工場：プレカット化の進行に伴い，木材販売維持のためにプレカット事業を行う必要があった。そのため，運搬等に便利な札幌近郊に立地し，近年急激な規模拡大がみられた。以上より，北海道のプレカット業界は，製材業母体の大規模工場，総合木材業母体の工場が影響力を高めつつある。また，道北や道東，道南の各地方でも，大規模工場が地場需要を満たすように拡大していることより，今後は地域ごとに大規模工場が発達し，地域の棲み分けが起こるであろう。

2)使用材　道内のプレカット工場の一般的な使用材は，欧州産ＷＷであった。柱や梁，桁等の性能が必要な部位では，集成材の使用が主であった。補助金や施工者の意向から，大半の工場で少量ではあるが道産集成材の使用も見られた。しかし，道産集成材の入手困難性が課題となっていた。母屋・束，間柱等の性能があまり必要ない部位では，無垢材使用が主であり，近年の外材高騰等の影響から道産無垢材の使用も多く見られた。しかし，ここでも道産無垢材を安定供給できる大規模製材工場がない等が課題となっていた。以上より，集成材工場や大規模製材工場を木材業界や国・道が協力して整備することで，道産材供給体制を強化することが必要であると考えられる。